

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全32回--24

2023年07月

写者

小原靖夫

第24回 信仰の先達として証しされた人びと④

アブラハムとその族長たち

第11章⑰節から⑳節 信仰

- ⑰信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。
つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。
- ⑱この独り子については、
「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。
- ⑲アブラハムは、神が人を死者の中から
生き返らせることもおできになると信じたのです。
それで彼は、イサクを返してもらいましたが、
それは死者の中から返してもらったも同然です。
- ⑳信仰によって、イサクは、将来のことについても、
ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。
- ㉑信仰によって、ヤコブは死に臨んで、
ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、
杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。
- ㉒信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、
自分の遺骨について指示を与えました。

今日は11章⑰節のところからご一緒に学んでいきたいと思えます。

⑰節以下は丁度、創世記の第17章からの事柄が中心になって出てまいります。
先ずは「イサクを献げた」という出来事です。

第⑰節、

信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。
つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。

創世紀の第17章⑩節のところにこんな言葉があります。「神は言われた。『いや、あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む。その子をイサクと名付けなさい。わたしは彼と契約を立て、彼の子孫のために永遠の契約とする。』」

神が契約（しかも永遠の契約）を立てられて、イサクを与えてくださったところから、イサク奉獻の問題が生まれて来るわけですが、イサクは、受胎が全く不可能な（生殖的には両親は死んだも同然の）状況下で、唯、神の恵みの御力によって授かった子どもでした。アブラハムも妻も長い期間、子どもを授かることができるだろうと思いながら過ごしてきましたが、やがてそれが絶望的な状況に至った時、神はにわかに「さあ、あなたに子どもを与えますよ」と仰ったのです。

このとき、神は、不可能が可能になるという神の御業を信じる信仰を、アブラハムの中に強く植えつけてゆかれたのです。

しかも、ここでは側女の子イシュマエルのことには全く触れられていません。むしろ、独り子ということに著者は重点を置いています。そして、独り子とか、独りの人という表現は、暗にイエス・キリスト御自身を指しています。ですから、そうしたキリストとの結びつきを下敷きにして、このことは語られていると考えられます。

つまり、私たちは⑩節以下を読んでいく時、これを単にイサク物語やアブラハム物語として読むのではなく、更に意味を深めて、イエス・キリスト御自身について語られているフレーズでもあるとの観点から、この箇所を味わってゆくことが重要だと思うのです。

今日のテキストの冒頭で「信仰によって、アブラハムは試練を受けたとき、イサクを献げました」とあります。

この「献げました」という言葉に使われている動詞は<完了形>です。アブラハムが神の御前において告げられた御言に対して、「信仰的において」確かに承知し、その通りに応答したという事実として捉えられています。

ところが、その同じ事柄に対して少し先のところでは、

「献げようとしたのです」という言葉が用いられ、この動詞はヘブライ語で<未完了形>が使われています。これは神の御前にイサクを献げるという行為がまさに行われんとしたのだが、それは「神によって止められ、成就しなかった」という経緯を表しています。

そのように、私たち一人一人が神の御前に、御心に従うという難事を果たす際、自分自身の中で思考実験を繰り返し、御言を反芻しなければならないような問題が沢山出て来るだろうと思います。先ず、アブラハムがイサクを献げたという信仰、その信仰そのものについて見つめてみても、これは創世紀の22章の①節から始まって、ずっと描かれている事柄なのです。それを踏まえて⑩節以下の3つの節を一つ一つ丁寧に味わっていきますと、私は三つの大きな問題提起をしていると思います。

第⑱節、

この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。

一番目の問題は、「自分のたった独りの子であるイサクを神の御前に献げる」ということです。「アブラハムよ、お前が持っているものの中で一番大事なものを、それはお前の命を超えたもの、お前の命よりも大事と思っているもの、そのたった独りの子どもイサクをわたしに献げなさい」。93

私たちが神の御前に献げ物をする、特に『自らを献げる』という場合、自らの何を献げるのかという問題が出て来ます。一番大事なものは自分の命ですが、通俗的には全財産を献げること、あるいは、これだけは絶対に譲れないと考えているものを神の御前に献げ尽くすこと、自分はそれらを捨て去ることを承知していることだと捉えてよいと思います。ですが今回神がアブラハムに要求された「献げもの」は、彼自身の命を越えたもので、これを人生から奪われたならば、死ぬよりも辛い献げもの「イサク」であったのです。

二番目の問題は、「このイサクは神の契約の子である」という事実です。

このイサクは、彼の子孫が大いなる国民になるという神の契約によって授かった子です（創世記21章⑱節）。ですから、そのイサクを神の御前に屠って献げてしまうならば、すべての国民が祝福を受けるという契約が反古にされ、白紙になってしまいます。つまり、この子によって大いなる国民が生まれると契約を立てられた神が、なにゆえか今度は、その子を屠って献げなさいと仰るのですから、わけが分からなくなります。将来への希望とか、これでこの地上で幸せになれると考えてきた一切のものが消滅してしまう、生きる意味を失い、生きる価値を失ってしまうことになります。

その意味で、この神の奉獻命令というものは、アブラハムにとって極めて不条理な御命令であるし、不信との葛藤の火種ともなりうるものです。だから「神がそのようなことは仰るわけがない」と、その場を立ち去ることもできたわけですが、今回あくまでも、彼が神の御言にお従いしてゆくならば、イサクの存在ゆえに神によって既に保障されてきた様々な祝福をすべて、ご破算にしてしまわなければならない覚悟が要求されるのです。

アブラハムはその時、自分に与えられるはずの祝福、契約の子イサクを通して神が実現なさろうとしていたはずの素晴らしいビジョンに固執しなかった。「神が言われるのだ」ということだけで、自分自身の思いや都合や将来の問題に拘らないで、「今、只今、自分に語りかけられた神の御言」に百パーセント聴き従った。（過去に与えられた御言を、自分の信仰において、言わば『上書き更新』したのです。）

これが、アブラハムがイサクを献げるという行為における一番目と二番目の問題の『答え』でした。

第三番目には、もっと大きな問題があるのです。

「あなた自身がその子を屠って献げなさい」ということです。

ところが聖書には、例えば創世記の第9章には「人の血を流す者は、人によって自分の血を流される」とあります。人は、神に型どって創られたものだから、殺してはならないと神に堅く命ぜられてきました。ですが今回、「その子を屠って命を献げなさい」というのは、他ならぬ神からの御命令なのです。この大きな矛盾をどうクリアしたらよいのでしょうか。

人の命、ましてや息子の命を自分の手で奪うということが、どんなに神の御前に重罪であるか、死罪でも足りぬ罪であることをアブラハムは十分認識し、その問題と唯独りで厳しく対峙、対決したのです。そして「ついにその戦いに勝利して、今回の神の御命令に服従する道を選び取ったことが、アブラハムの<信仰>だった」のです。これが、「信仰によって」という神の厳正な篩を前にして、アブラハムに襲いかかって来た最も過酷な試練であり、それに対する、輝かしい「信仰の勝利」であったと思います。

このことを通して私たちが理解せねばならないことは、アブラハムは神に従う時、自分の側の言い分や道理の追及などをせず、限定枠や条件をつけなかった、神の御言だからということだけに徹底して、口を結んで従い通した。それは<信仰>という大きな問題を考へて行く上で、最も大切な要件として捉えられなければならない事柄だと思ひます。

しかしながら、これは、イエス・キリストの十字架と復活の出来事を経た後の新約時代の手紙ですから、それを踏まえて、著者はその後に⑩節を付け加えました。イサクの奉獻の出来事があまりにも衝撃的過ぎるので、それをそのまま書いて終わりにすることができなかつた、付け加えずにはいられなかつたのです。

(このご指摘はすごいです。脱帽です)

第⑩節、

アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったのも同然です。

「神は、死者の中から生き返らせることもお出来になる」と言うとき、私たちはすぐにイエスの完全死からの完全復活ということを連想するのですが、「アブラハムはイエスの復活を見ていない」のですから、ここでの死者とは「死に定められた者」と見做されます。

神は既に、(生殖的には)死んだも同然の「死に定められた両親」を『生き返らせ』て、新しい命なるイサクをお授けになった。そこから生まれた揺るがぬ信仰は、アブラハムの中に生きていたことでしょう。ですから「たとえイサクが死んだとしても、神の契約はそれで反古になることはない」という信仰に基づく信念が生まれたのです。それは「イサ

クは死んでも甦る」と信じることは違います。つまり、神が『生き返らせる』ことが御出来になるのは、「死んだも同然の死者なる両親」だという信仰です。

しかし実際には、いったん神の御前に御献げしたイサクを、神から御返し頂けた。それを始めから見越して、アブラハムは奉献しようとしたのでは勿論ありません、私たちはアブラハムの信仰を知っていますから。「献げたところできつと神は返してくださるだろうから、とりあえず献げてみよう」というような、最後の逆転を期待する自分を丸め込んで、ありえない奉献を促す発想、それはアブラハムの<信仰>とはかけ離れたものです。

「この奉献によって、よしんば全てが取り上げられ、その時点で全く虚しくなったとしても、神の御言だけは真実なものとして生きている」という<信仰>に全てを懸けてゆく。その姿勢において、神の御言が生きてくる。それは「彼の命なるイサクが保証される」のではなく、「神の御言が生き続けてゆくことが保証される」という形で、このことを読み取っていくことが最も大切なことだと思えます。

新約外典（使徒教父文書）の中に「バルナバの手紙』というのがありますが、その中には「イサクの奉献は、十字架の上のキリストの死と復活の予型である」ということが書かれてありますが、とても興味深いことだと思えます。勿論、この手紙の著者には、⑬節において、そういう意図もあったでしょう。

アブラハムによるイサクの奉献に、キリストの死と復活の出来事を重ね合わせて、両者は神の求めに応じた「信仰における犠牲」としての奉献であるとし、正に、モリヤの山とゴルゴタの丘とは著者の頭の中ではひとつとなっていたと思えます。

一方はイサクの父アブラハムの信仰によって献げられ、もう片方は御父御子の究極の御心によって献げられました。この十字架の真実は、ローマの法律にて裁かれた罪に対する死刑執行ではなく、筆者によれば、御父への御子の「犠牲の奉献」でありました。つまり、御子の人類への救いの御約束を成就させるため、御父に献げられた「犠牲の生贄」であったと捉えているわけです。そういう捉え方が教会の長い歴史の中で保たれてきました。

私たちも「贖い主イエス」という言葉を使う時には、「殺されたイエス」ではなく、「神の御前に命を献げられ、人類の罪責の犠牲となられたイエス」ということで十字架刑のイエスという御方を受け入れており、その信仰は、初代教会から今日まで連綿として受け継がれている信仰なのです。

既に与えられた大きな御恵み、アブラハムについては、イサクを与えられた奇しき御業から生まれた神への堅固な信頼によって「その子を屠って献げなさい」という思いもかけぬ受け入れ難い神の試練に遭遇した際も、あの御恵みを与えてくださった神ならば、そこにも何か計り知れぬ意図をお持ちになって、このことを自分に促しておられるに相違ないと信じる事ができた。アブラハムは、厳しい試練やいたずきさえも、神の深慮による御恵

みとして受け止められる<信仰>を勝ち得ていた。それほど「イサクを授けてくださった神の御恵みは偉大であった」ということを、著者は一所懸命語っているのだと思います。

今、教会ではクリスマスに向けて準備を進めていますが、イエス・キリストが私たちに与えられたという神の出来事は、私たちがどんなに辛く苦しい試練の中に立たされても、それを乗り越えられるだけの十全な神の御力、御恵みとして受け止めるべきことなのです。

すべてを超えて、一切のこの世の悪の力を鎮静化させ得る御力として、奇しき御恵みとして、私たちに与えられた神の出来事が、このクリスマスでありますから、私たちがそれをどう受け止めるかが、これから先の様々な問題に対峙したこの世との闘いにおいて、いかに対処すべきかを決定づけるものになると思います。この受け止め方が豊かであればあるほど、確かであればあるほど、あらゆることに対して打ち勝つ力が、神によって豊かに増し加えられていくのです。

第⑳節に、

信仰によって、イサクは将来のことについても、ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。

この祝福は創世記の第27章のところに出て来ます、イサクが自分の子どもを祝福した件で、そのテキストには、色々な聖書学者が神学的レベルで註解を加えている書物が幾つもあります。その中で「このヘブライ人への手紙の著者は、すごい深読みをしている」と評している学者がかなり多くあります。

と言うのも、聖書においては「イサクは、長子のエサウに成り済ましたヤコブに祝福を与えたけれども、エサウ本人には祝福を与えていない」という内容の記載があるからです。確かに創世記の第27章の⑳節から㉔節までを読みますと「エサウを祝福した」とは書いてありませんけれども、「このように祈った」あるいは「このように言った」という記載はあります。だから「この手紙の著者は深読みをしている」と言われているのです。

つまり、神に向かって祈ること、語ることはすべて、「祝福」に通じるということです。私たちが神に祈って達成できることは「神の祝福を受けることだ」という解釈がありますが、私たちの本来の信仰においては、この手紙の中にあるように、「人のために祈ることは祝福であって、どんな場合も呪いではない」と言えるでしょう。

その通り、エサウに対してヤコブは「この人がいなくなりさえすれば、祝福が生まれま

す」とは決して言っていません。そのように、聖書の信仰はすごく面白いのです。つまり「敵対する人間がそこにいる場合に」その人に対して祈る時も「彼らが消えてなくなれ」とは祈らない。「旅路が無事であるようにとか、命が全うできるように」と祈ります。

普通、そのような人がいると現実的には邪魔になります、自分たちにとって不都合です。いなくなればいいと心の底では思うかもしれませんが。けれどもそんな人に対しても「いなくなれ」とは祈らない、呪わない、排除しないのです。なぜなら、そうは言わせぬ、そうは祈らせぬ御方が、いついかなる時も、私たちの裡に確かに『おられる』からです。

しかしながら、実際の行動面では、次男坊ヤコブが長男エサウをないがしろにするのです、そしてヤコブが繁栄するのです。そうしてエサウはさまよう者になり、長男としての家督の権を得られないのです。これを、当時の社会の血縁法則に立って見てゆくと「聖書が描いていること、特に創世記に書かれている出来事は目茶苦茶だ。」となるわけです。

ところが、このことは、私たちに向かって『チャレンジ』をしているのです。つまり「常識や慣習などの社会的秩序によって、権利がある、資格があるからと言って、必ずしもそうなるとは限らない」ということを、ヤコブとエサウの物語は私たちには伝えているのです。成ることの全てが、神の御心に添うことであり、神の御選びによることであると。

第②節、

信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。

ヤコブは、子ども一人一人のために祝福を祈った。12人の息子たちのために彼は杖に寄りかかって神を礼拝した。これは、ヘブライ語原典によれば、「杖のヘッドの部分、それに背中を押し当て、それに寄りかかって」となっています。それは、「一人では立てなくなり、よぼよぼになっても、彼は自分が幸せになりたいとか、子どもが面倒を見てくれたらと考えないで、最後の最期まで子どもたちのために祈りに祈った」ということです。自分には、もはや何の可能性もなく、何も所有していない、あと自分に残されているのは他者に祝福を与えること、神を礼拝することだと信じ、それをやり抜いたと書いてあります。それさえ達成できれば、年を取ることは、どんなに幸せなことだろうかと思います。

「私は何も楽しみがなくなったから、せめて子どもたちが仕えてくれて満足させてくれればいいのに・・・」と呟く人に対して、「その満足は信仰に依らなければ適わないのです。義理人情や損得勘定では、本当の満足は生まれて来ないのですよ」と言える辺りがクリスチャンの神髄だと思います。聖書の出来事は、この世の物差しを持ち込んで考えたら、おかしい事だらけです。「そんな馬鹿な」と言いたくなる『神の出来事』が一杯出て来ます。しかし彼らは「それこそが神の御旨だ」と信じたからこそ、従ったのです。私たちの理屈など、神の御前には何も役立たないと十分承知していたから、御言に従えたのです。

現代は「自分たちの論理や学問が、聖書の神をより明らかに浮き彫りにして行くのだ」というようなバリバリの神学者が現れて来られたので、「神は人間によって栄光を与えられる」という時代に突入しているそうなのです。

しかし、そんな神は、聖書の神ではありません。聖書の神は他者から栄光を与えられる必要はあられない、神御自身が既に栄光に富んでいらっしやるのだから。「人間が何と言おうと、神は揺るぎなく神なのです」と、そのように神を信じている信仰を持たない限り、聖書の信仰に生き貫いて行けないだろうと思います。

クリスマス話に戻りますが、

「まさか飼葉桶の中に眠る赤ん坊が・・・」と皆が思う時に、「この御方こそ、世界を全く新しくされる救い主なのだ」と崇めて礼拝したのは、東の国の博士たちでした、異邦人でした。新約聖書ではそう語っています。しかも「自分たちの持てる最高の宝、黄金・没薬・乳香を献げて、その幼子なる御方を心から礼拝した」のです。

一方、天の声に招かれた羊飼いたちは「さあ、あなたがた、苦しみから解き放たれますよ」と解放宣言を受けたので、行って、喜んで幼子イエスを拝んだ。そして「これは天使が告げた通りだった」と皆に知らせて歩いた。だが「心からこの御方に従うべきではないか」とまでは考えが至らず、それが終わると、さっさと自分の持ち場に帰ってしまった。ところが、その飼葉桶の中にいる幼子に、本当の意味での礼拝を献げたのは東の国の博士たちだった。神の選民ユダヤ人ではなかったのです。

ユダヤには、本当に長い間、真に神を礼拝する人間が現れて来なかった。神は豊かな御恵みを『選民』の中においてくださってきたのに、人々は皆そっぽを向いてきた。そして遙々遠くの東の国から、その御方が生まれたことを指し示す星を目当てに旅してきた人々だけが、イエスを礼拝した。ですから本来、クリスマスは、イエスの御誕生記念の12月25日でなく、東の国の博士らがキリストと拝した公現日を記念する1月6日なのです。

②節、

信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について指示を与えました。

ここにヤコブの子「ヨセフ」が出て来ます。これは創世記の第50章、最後の章の出来事です。その前のヤコブの祝福が49章ですから、更に終わりの方に出てくるわけです。

ヨセフは、神が必ずやイスラエルをエジプトから導き出してくださると信じていた。だからこの手紙には「イスラエルの子らの脱出について語り」と書いてあります。しかし、本当は未だそんな時代ではなかったのです、ヨセフは宰相として君臨していた時代です。ところがその時に、ヨセフが言ったことは何かと言えば、「私たちはこの国にずっといるべきではない。やがて神が示してくださる時、私たちはイスラエルに帰って行くのだ。その時には、私をどうかこのエジプトに残さないで、私の遺骨を持って行ってください」と言っているのです。

これにも、二つの大事なポイントがあるだろうと思います。

エジプトでは偉大な業を為して死んだ人の亡骸は丁重に葬られ、立派なピラミッドのようなお墓が作られるでしょう。だからヨセフのピラミッドがあってもいいのです。が、彼は「そのようなこの世的な記憶をこの地上に残すことは価値がない」ということを知っていました。それが第一のポイントです。そして、「私はイスラエルの民として、彼らと共にいることが一番大きな喜びであり感謝なのだから、どうか、死後はあなた方と一緒にカナンの地に連れ帰ってください」と依頼しました。それが第二のポイントです。

聖書の信仰の記録をずっと読んでゆきますと、お墓を残した人は、あまりいないのです。ヨセフはエジプトに立派なお墓を作れば、彼はすごかったと皆は言ってくれるだろうけども、ヨセフはそんなものは欲しくなかったのです。むしろ、死後はイスラエルの人々と共に居続けて神が為される御業をずっと見て行きたい、神が私にしてくださった御約束をどのような形で成就されるだろうかと一緒に見たい。それだから「私の骨を携えて帰ってくれ」と頼んだのです。こうしたヨセフの信仰もアブラハムに負けず劣らず、ものすごい信仰なのです。

日本文化の影響からか、私たちは、自分が記憶されることを一番大事だと思っています。しかし、多くの人に覚えられることが大事だと考えている人の99.9パーセントまでは「神が自分を覚えておられることを忘れている人」なのです。皆が忘れても神が覚えておられることが分っていたなら、人生において何かを遺すことにあくせくする必要は全くなくなり、この私は幸いな人間なのだ信じられるのですが、そういう<信仰>こそが、私たちクリスチャンの中からさえも、欠落している部分だと思うのです。

「私たちが本当に慕っているのは、神であり、命を捨てられたイエスです」そういう信仰によって生きた人間たちの列伝が、この手紙には、ずっと描かれていくわけです。

神は正にそのようなことを考えられて、御子イエスをこの世にお送りくださった。極端な言い方をすれば、「人間の目には、どこの馬の骨ともわからないような形でイエスがこの地上にお生まれになり、ホームレスのような家畜小屋の中に寝かせられていた。しかし、そこにこそ<神の国>があり、神の御愛がある」という信仰がなければ、私たちは、せいぜいこの世の信心や、世俗的レベルの信仰しか持てないのではないのでしょうか。

今回の創世記に登場した人物、アブラハムからヨセフまでの<信仰>についてはこれで一通り終わり、この次は出エジプト記に入ります。出エジプト記に入って「モーセ」の話が出て来ますが、私がもう一度皆さんと一緒に確認しておきたいと思うことは「私たちが抱いている信仰とは何なのだろうか？」という問題です。

今年のクリスマスは「自分たちの信仰の現実を見定めてゆくために」迎えてゆきたいと思っています。来年は幸せが沢山あるとは言えない年だからこそ、益々神の愛を力強く証してゆく年として来年を迎えられれば「飼い葉桶の中の主を崇める」ことになると思います。

(1997年12月13日)

「ヨセフ物語4 ファラオの夢解く」

創世記 41章

森 容子

まず、37章からのヨセフ物語のストーリーをおさらいしましょう。ヨセフはイスラエルの父祖ヤコブの12人の息子の年寄り子として生まれ、特に父の愛妻ラケルの遺児としての寵愛を一身に受けていたことを兄たちに嫉妬されて、エジプトへ奴隷として売られる羽目となり、更に、そこで仕えていた主人の妻からの誘惑を拒絶したことから、エジプト王の監獄に囚われることにもなりました。

ヨセフは、その獄へ新しく入ってきた給仕長の夢と料理長の夢とを解き明かしますが、果たして、その三日後の王様の誕生日、ヨセフの夢解き通りに、給仕長は元の王の献酌官に戻される一方、料理長は首をはねられ、木にかけてさらしものにされました。ヨセフは、給仕長の方に予め、解放されたあかつきには冤罪である自分を助け出して欲しいと頼んでおきましたが、彼はそんなことはすっかり忘れて、2年間が経過してしまいました。

続いて、今回の41章のアウトラインは、それから2年後、ヨセフが30歳になったとき、エジプト王ファラオが一夜の内に意味深長な夢を2つ見ます。そして、その解き明かしを求めて、エジプト中の賢者を集めましたが、埒があきません。そのときになってやっと、給仕長は牢の中のヨセフのことを思い出し、ヨセフによる夢解きを王に進言します。

ヨセフの解き明かしによれば、王の2つの夢の中での雌牛と穂は、エジプトの牧畜・農耕の実りと陰りを表わしており、7頭と7本は、7年を表わすとのこと、つまり、エジプトに7年の大豊作と、続いて7年の大飢饉が訪れるという意味で、すべては神様が成そうとしておられることを示しているとのことでした。

そして、大豊作の内に食糧の備蓄が肝心であると、ヨセフは王に、賢い指導者の要請を提案しますと、王はヨセフ自身にその役を仰せ付け、王に次ぐエジプト全土の統治者に抜擢し、かつ、オンの祭司の娘と結婚させました。

その後、ヨセフは計画的に食糧の貯蔵を実行し、大豊作の7年間に男の子二人を授かります。更に、その後の7年間の大飢饉は、エジプト全土のみならず周辺諸国をも激しく襲いましたが、ヨセフの十全な備えは功を奏しました。

このような41章の内容は、前回40章の夢解きにおける神の御心と運命的な結末を更にヴァージョンアップした内容であり、旧約学者の左近 淑先生は、この41章の解説に「運命と摂理」という表題をつけておられます。

確かに41章の物語は、これまで運命に弄ばれるかのように、イスラエルの族長の御曹司という立場から、17歳でエジプト人の奴隷へ、28歳で主人の妻へのレイプ未遂の汚名

を着せられてエジプト王の牢獄へと、下へ下へと墮ち続けてきて、今やどん底状態のヨセフに生じた、神様の御手による起死回生の物語です。

彼はひたすらイスラエルの神様を信じ、祈り続けながらも、牢獄での当初は、この世の不条理や人への不信感に歯嚙みするような心を増幅させていたと思われます。ヨセフは14節で給仕長に「ついては、あなたがそのように幸せになられたときには、どうかわたしのことを思い出してください。わたしのためにファラオにわたしの身の上を話し、この家から出られるように取り計らってください。」とあれほど懇願したのに、給仕長は夢解きの恩と約束を忘れ、待っても待っても一向に迎えを寄越してくれません。

冤罪によって投獄された牢の中の2年間は、毎日が死の不安と恐怖にさらされ、祈りに示される主にある希望と、現実世界の絶望との間を行ったり来たり、気の遠くなるような長く苦しい日々であったことでしょう。しかし、人生に主が伴われる限り、どんなに暗い夜も、漆黒のように見える闇の夜も、明けない朝はありません。

ヨセフは次第に、この不幸の原因を自分の中に探り求め、10代の後半に父の寵愛を当然のことに独り占めしていた傲慢さを思い知りました。夢解きの才能はその頃からありましたが、その話が兄たちに鼻持ちならぬ不快を与えていたことにも気づきました。元の主人ポティファルの妻に対しても、自分にも隙があったなどの落ち度を反省し、謙虚にされました。そして神を御前にして、彼は日々悔い改めを祈りに祈ったことでしょう。

更にヨセフは、この不幸な出来事の原因だけでなく、神が計画されておられるであろう真の目的についても思い巡らし、祈り続けました。そして、いくつものことが祈りの内に示されました。2年間は、彼にとってそうした必要不可欠の黙想の期間であったのです。

そしてある日、ついにヨセフが、日の下に連れ出される千載一遇のビッグチャンスが訪れます。それは、ヨセフの祈りに対して神が示されてきた、「神の御摂理を顕わにするための<神の時>が至った」という特別な日でありました。

無理やり奴隷とされ、覚えなく囚人とされたヨセフは、王の夢の解き明かしの依頼を受けすることを契機に、一気にエジプト王に次ぐ統治者という頂点へ昇りつめてゆきます。これが神の御摂理でなくして何でありましょうか。

ヨセフは、王から直接、夢のお話を伺う前に、その解き明しについて16節で「わたしではありません。神がファラオの幸いについて告げられるのです。」と説明しました。それから、同じことを二度念を押し、ヨセフは夢のお告げを、あくまでも自分発信ではなく「神からのお告げ」であることを再三ファラオに示しつつ、万事、慎重に解き明かしを続けてゆきます。彼の夢解きの使命は、ある意味命がけで、失敗は決して許されません。

ヨセフによる夢の解き明しは、以前に王が呼び集めた他の賢人たちのように、単に王の不安を解消し、ご機嫌を取り付けるための「作り話の気休め」ではありませんでした。しかも、7年の大豊作と、続く7年の大飢饉という、人知では計り知れないスケールを持って差し示される特別な内容であることを、ファラオも理解したことでしょう。

ヨセフは、すべての解き明しを王に告げた後、32節で「ファラオが夢を二度も重ねて見られたのは、神がこのことを既に決定しておられ、神が間もなく実行されようとしておられるからです。」と告げ、「神のお告げ」に対する即応として、早急に手を打たねばならないこともお示ししました。

神様は、上から下へ御言を下し給うだけの一方通行のお方ではありません。常に、私たちと双方向の関係を要求されるお方です。それは、神様が示された事柄に対し、私たち側に相応しい応答を要求されるということです。そして、その応答は「いつか：someday」ではありません、「今：just now」なのです。

ヨセフは勇気をもって王に進言します。「すぐ、聡明で知恵のある人物をお見つけになって、エジプトの国を治めさせ、また、国中に監督官をお立てになり、豊作の七年の間、エジプトの国の産物の五分の一を徴収なさいますように。このようにして、これから訪れる豊年の間に食糧をできるかぎり集めさせ、町々の食糧となる穀物をファラオの管理の下に蓄え、保管させるのです。そうすれば、その食糧がエジプトの国を襲う七年の飢饉に対する国の備蓄となり、飢饉によって国が減びることはないでしょう。」と。

そして、ヨセフの身の上にはその日を境に、神様によって本当に素晴らしい大逆転が一気に生じました。37-42節をご覧ください。

「ファラオと家来たちは皆、ヨセフの言葉に感心した。ファラオは家来たちに、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と言い、ヨセフの方を向いてファラオは言った。「神がそういうことをみな示されたからには、お前ほど聡明で知恵のある者は、ほかにはいないであろう。お前をわが宮廷の責任者とする。わが国民は皆、お前の命に従うであろう。ただ王位にあるということだけで、わたしはお前の上に立つ。」ファラオはヨセフに向かって、「見よ、わたしは今、お前をエジプト全国の上に立てる」と言い、印章のついた指輪を自分の指からはずしてヨセフの指にはめ、亜麻布の衣服を着せ、金の首飾りをヨセフの首にかけた。」

そして、そのようにして宰相となったヨセフが祈りと神の知恵によって成した働きには、凄まじいものがありました。49節に「ヨセフは、海辺の砂ほども多くの穀物を蓄え、ついに量りきれなくなったので、量るのをやめた。」との記載があります。本当に、エジプトの地は、ヨセフがいなかったら、どうなっていたでしょうか！

また、ヨセフには、エジプトの名家なるオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトを妻として与えられ、大豊作の時代に、二人の息子を授かりましたが、彼が尚、若い頃の苦しみや悲しみ、悩みをひきずり、心深くに留めていたことは、息子其々につけた名前に表わされています。ヨセフは、長男をマナセ（忘れさせる）と名付けて、「神が、わたしの苦勞と父の家のことをすべて忘れさせてくださった。」と言いました。また、次男をエフライム（増やす）と名付けて、「神は、悩みの地で、わたしに子孫を増やしてくださった。」と言いました。それらは、神様への限りない感謝の顕れであると同時に、ヨセフの父ヤコブや故郷を慕う本心に鍵をかけた、“やせ我慢”の命名であったようにも思われます。

ヨセフは、父の家のことを、エジプトに連れてこられてこのかた、恐らく片時も忘れたことはなかったでしょう。子どもが生まれたからと言って、忘れられるはずがありません。また、エジプトの地で自分の子孫が増えても、それを共に祝い、喜びを心から分かち合える、自分の真の親族がここにはいない悲しみが、彼の心に重くのしかかっていたことでしょう。

でも、そんな彼の複雑な心中も、神様は決して見過ごしにはされず、深い配慮に満ちた御計画も、すでにご準備されていたのです。神様はヨセフを「知恵ある者として特別な地位に就かせよう」とか「エジプトの農業や牧畜を振興させよう」というような狭い領域に留められず、深く広い歴史的ビジョンにおいて、「神の僕」ないし「神の将」としてお立てになり、そのように取り扱われたのです。これが神の偉大な御摂理というものです。

この先、45章8節に、再会した兄たちに向かって「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」というヨセフの言葉があり、更に50章20節では、「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。」と語りかける言葉もあります。

ヨセフの運命を辿れば、悲惨なものも輝かしいものも、押しなべて、神の御摂理の中で大いに意味あるものとされていることが徐々に理解されていきます。私たち其々の主にある人生も、全く同様のことが言えるのではないのでしょうか。今、目に見える現実だけが、神様の御心や御業を表すものではありません。目に見えない神様の真実を遥かに仰いで、それを信じ、主に委ねて生き貫くことこそ、私たちの信仰の素晴らしさ、醍醐味であるのです。

「信じる」とは、英語でbelieve、beは存在を表わし、lieveはlive、生き方を表わします。つまり、「信じる」とは、「自分の生き方、生き様が、主によって、そこに存在する」という宣言であり、告白です。「主を信じる」とは、自分の全存在をかけて、神様の御旨に傾注するという生き方です。

私たち其々の人生を最善に司られる神様に思いを馳せ、しばし黙祷致しましょう。

写者あとがき

信仰とは、神様が私たちに望まれていることをできる限り理解すること（自分の都合は一切捨て去り）、見えない事実、未だ不確定で分からないことは、それを現実に至らせる力が神様にあり、神のご計画は必ず実現することを信じて忍耐すること、祈ること。

11章の初めから「信仰」について学んでいます。今回、松山先生は「イサクを授けてくださった神の御恵みは偉大であった」との観点からアブラハムの信仰を噛み砕いて解説してくださっています。そのアブラハムはイエス・キリストを見ていない旧約聖書と新約聖書の橋渡しをヘブライ人への手紙の著者に委ねているように感じました。

⑰節の完了形と未完了形の違いを森容子先生に分かりやすく解説して頂き、アブラハムの信仰の躍動を感じ取ることができます。この⑰節の二つの文を何度も眺め、読み、書きながら、聖書の文章は短くても長い歴史を語り、状況の変化を表しており、素人には難解というよりも理性的解釈を不可能にしまいそうな深い意味があることを学べて感謝です。そして11章①節の「信仰とは」の文章を何度も味わい一步一步の牛歩であってもアブラハムの信仰の深さを学べるように感じています。

今回も森容子先生に「ヨセフ」についての説教をお願いしました。ヨセフの投獄中の2年間の感情の動きと悔い改めへの覚醒過程を丁寧に書いて頂きました。ヨセフ物語から「神様は、上から下へ御言を下し給うだけの一方通行のお方ではありません。常に、私たちと双方向の関係を要求されるお方です。それは、神様が示された事柄に対し、私たち側に相応しい応答を要求されるということです。そして、その応答は「いつか：someday」ではありません、『今：just now』なのです。」 「『信じる』とは、英語でbelieve、beは存在を表わし、lieveはlive、生き方を表わします。つまり、『信じる』とは、『自分の生き方、生き様が、主によって、そこに存在する』という宣言であり、告白です。『主を信じる』とは、自分の全存在をかけて、神様の御旨に傾注するという生き方です。」と私たちに向けたメッセージをくださいました。

このように二人の先生を通して、私には「遠くのもの近くになる」という実感を毎月頂いておりますこと真に感謝でございます。（2023年7月5日。写者記）